戦後民主主義の裏面史

―佐藤彰宣『〈趣味〉としての戦争―戦記雑誌『丸』の文化史』―

長﨑励朗

一　はじめに

中学生の頃、『教科書が教えない歴史』という本が書店で平積みされているのを見て興味をひかれた記憶がある。一緒にいた母に「面白そうじゃない？」と水を向けると、「これ、右翼の本やで。」とたしなめられた。

今調べてみると、この本は一九九六年に出版されたもので、著者も翌年に「新しい教科書をつくる会」の結成に参加している藤岡信勝だから、現代までつづくいわゆる「日本の右傾化」に先鞭をつけた本だったとも言える。

そんな書籍が当時少年だった私の興味をひいたのは、ひとえに「教科書が教えない」というフレーズが持つ蠱惑的な響きによるところが大きい。学校で学ぶ公式的で、それゆえにどこか退屈な内容より、もう一段掘り下げた知識がそこにはあるのではないか。そうした期待感が、一部の若者たちの心を捉えたことは想像に難くない。その意味では、内容が右であれ、左であれ、「教科書が教えない」ものであればなんでもよかったのだ。

本書はこの種の若者たちがかつて愛読していた雑誌『丸』を対象とした歴史研究である。『丸』は戦後民主主義の中でタブーとされた「戦争」を主なコンテンツとし、評論や小説など多様なアプローチで現在にいたるまで読者を魅了し続けてきた。その変遷を丹念に調べ

上げた本書は、論壇の周縁研究であり、同時に戦後民主主義の裏面史であるともいえよう。

以下では本書の概略を示した上で、その内容をもとに発展的な考察や批判を展開してみたい。

二　本書の概要

まずは本書の章立てを確認しておこう。

はじめに

第一章　『眞相はかうだ』の鬼子
　　―一九四八年～一九五六年

第二章　戦記雑誌への転身―一九五〇年代後半

第三章　「丸少年」の浮上―一九六〇年代初頭

第四章　総合雑誌化の兆し―一九六〇年代後半

第五章　「現代の戦争」の余波と軍備への問い直し
　　―一九七〇年代前半

第六章　個別化する「戦争」
　　―一九七〇年代半ば～

おわりに

本書は冒頭、次のようなフレーズの引用ではじまる。

『丸』を読まずして平和を語る勿れ。」

これは一九六五年時点における『丸』の自己紹介文であり、『丸』編集部の自意識であったと見て差し支えない。しかし、戦争を主なコンテンツとする軍事雑誌を読むことが、なぜ平和を語ることにつながるのか。本書の中心的な問いはここに凝縮されている。

「はじめに」で著者は、このような語りが必要とされた動機について次のように看破している。

「平和主義」としての厭戦意識が人々の間に浸透していた敗戦国では、なぜ戦争に関心を寄せるのかを弁護する必要があった。言い換えれば、興味の対象としての「戦争」を正当化するために、志向する理念としての「戦争」を語ることが求められたのである(一)。

つまり、この「志向する理念としての戦争」観の変遷を描き出すことこそ、本書の目的である。以下、順に各章を見てみよう。

第一章は創刊から黎明期までの『丸』に焦点を当てている。ここでは、意外なことに創刊時の『丸』がミリタリー雑誌ではなかったことが明らかにされる。「近代人のトピックス誌」と銘打ったこの時期の『丸』は思想的立ち位置に縛られず、「議論を見渡す」ことを志向していた。それゆえに、形式としては当時人気を博した『リーダース・ダイジェスト』を模倣し、平易で短い文章を多数掲載することで「明日のための教養」を手軽に得ることができる紙面構成をとっている。

一方、内容面では、海外の記事が中心であった『リーダース・ダイジェスト』に対してあくまで日本のトピックスを扱うというスタンスをとった。その路線を模索する中で見いだされたのが、公職追放者の起用と生々しい戦争体験の掲載である。発売元の聯合プレス社が『眞相はかうだ』と同じであったことから、筆者はこの時期の『丸』を「『眞相はかうだ』の鬼子」と表現する。『眞相はかうだ』はＧＨＱの占領政策の一環として放送された同名のラジオ番組をもとにしており、この番組はあくまで戦前戦中の日本人の価値観の愚かさを知らしめ、「再教育」するために制作されたものだったからだ。この時期の人々が切実に求めた「真相」とは、戦前の日本軍の愚かさや理不尽さだけではなく、肉親の最期を知る手がかりとしてのナマの戦場の記録でもあったのである。

第二章では、『丸』が戦記特集雑誌へと路線転換した一九五〇年代後半を扱っている。折からの戦記ブームに棹さして、この時期の『丸』は「胸のすくような快勝の記憶」を読者に提供することで人気を博した。しかし、その一方で戦後まだ間もないこの時期の戦記は遺族に対する「慰めの物語」としても機能していた。戦記雑誌としての歩みを始めたこの時期の『丸』は「遺族の体験の重さとナショナルな欲望、体験者の懐かしさなどの

様々な要素が折り重なるように受容された[二]」と筆者は総括している。

第三章は本書における白眉である。前述の『丸』を読まずして平和を語る勿れ」という規範が成立したのもこの時期だ。こうした価値規範が生まれた背景には、少年読者層の浮上があった。それ以前は戦争体験の当事者や遺族を中心とする中高年層をターゲットとして戦記を中心に掲載していた『丸』だが、この時期には、現代のミリタリー文化と接続するようなメカニックの記事が増加している。

『丸』が少年読者を想定するようになった要因としては、プラモデル文化の台頭や『少年マガジン』との相互参照が挙げられている。とりわけ『少年マガジン』と読者を共有していたという指摘は面白い。『丸』の編集長の助言で『少年マガジン』は戦記ものを増やし、逆にそれによって『少年マガジン』から『丸』へと「ステップアップ」する少年読者が増加するという好循環が生まれていたというのだ。実際、この時期の『丸』読者の平均年齢は二〇歳を割り込んでいる。

この「丸少年」たちに対する分析が面白い。彼らは「日教組に染まった」教師の言うことを聞くだけの「優等生」でもなく、そうかといって、当時問題化していた「マンボにくるい桃色遊戯にふける」不良でもなかった。主体的な問題意識を持ったエリート意識をもった少年たちの反学校文化として『丸』は受容されていたというのである。筆者はこうした知の追求のあり方を「ミリタリー的教養」と名付けた。冒頭でも紹介したような「教科書が教えない」ものであればなんでもよいという心性が、当時社会的タブーとされた「戦争」と結びついた最初期の例として銘記されるべきであろう。

第四章は戦争を主なコンテンツにしつつも、総合雑誌的な特徴を帯びていった一九六〇年代後半の『丸』について論じている。同時代の他誌と比べて、当時の『丸』は独特の位置を占めていた。『文藝春秋』ほどには懐古的ではなく、『中央公論』などに代表される総合雑誌に比べれば敷居が低い。加えて、当時論壇の中心を占めて

いた左派知識人だけではなく、保守系の論客も一定数登場していたことから、多様な思想的バックグラウンドを持ち、年齢的にも幅広い層が読者として定着していた。『丸』は論壇の隙間を埋めるような形で当時の人々に必要とされていたのである。

第五章は学生運動などによって、現実の政治が大きく揺れていた時代の『丸』読者に注目している。面白いのは、第三章で言及された「丸少年」たちのその後である。現在の感覚から見れば彼らは右派社会運動に取り込まれていきそうなものだが、読者投稿欄では、左派的主張と右派的主張が混在していたというのだ。

大人たちへの「抵抗」を梃子とする丸少年の心性は、一方で「反戦平和」の理念よりも現実政治に重きを置く「現実主義」へと向かいつつ、これまでの章でも述べたように、他方で「戦後民主主義の欺瞞」に異議申し立てを行う学生運動へと合流していった。安保体制の評価をめぐって対立する読者欄の様子からは、丸少年の心性が二つのベクトルへと分派していく様子が見て取れる(三)。

こうした分析こそ、本研究を「戦後民主主義の裏面史」として位置づけた由縁である。戦後民主主義への疑念は左派のみならず、右派社会運動の培養基ともなったことが、『丸』の歴史からは浮かび上がってくるのである。

第六章は、一九七〇年代後半以後の「自分史」ブームに棹さして、下級兵士などの草の根の語りを多くとり上げ始めた時期の『丸』について論じている。こうした潮流は戦争を語る際の焦点が組織病理から個人の資質へと移り変わっていったことを意味している。それがやがて「歴史認識の脱文脈化」をもたらし、戦争体験が安易に自己啓発へと流用されていく。「戦争の個別化」を俎上にのせた本章は、当時の『丸』やその読者を現代の文脈と接続する意味を持っているのである。

三　教養は反学校的？

ここからは本書から読み取れる視点をもとに考察を広げてみたい。

前述のとおり、本書が描き出しているものの一つは反学校的エリート学生の心性史である。実は筆者は前著『スポーツ雑誌のメディア史：ベースボール・マガジン社と大衆教養主義』でも、学校教育よりも一歩進んだ知を得たいと願う教養主義青年たちの姿勢に着目している。こうした一連の研究から見えてくるのは、スポーツを通じた教養主義であれ、ミリタリー的教養主義であれ、いずれも学校文化に馴染めない知的な若者たちの姿である。

こうした一連の研究は知的であるか否かを一元的に学力で評価する価値観を掘り崩すとともに、学校教育がはらむアポリアをあぶり出す可能性を持っている。

しばしば工場と重ねて論じられるように(四)、本来、学校教育とは人間をある標準的な範囲に「規格化」しようとする試みである。あえて過激な言い方をすれば、それはすなわち、企画から「下」に外れたものだけではなく、「上」にはずれたものも「不良品」とみなされる場所である。そんな環境の中で（少なくとも内面的には）「上」にはずれた少年たちがそれぞれの興味に応じたフィールドで自分なりの教養を形成するという現象は、少なくとも学校教育成立以来、普遍的に見られるものではないだろうか。

くわえて、「教養＝教育＝選抜(五)」という図式から考えれば、選抜の要素（つまりは試験に出る知識）が教育の中で比重が高まれば高まるほど、教養は反学校的色彩を帯びていくことになるだろう。近年は学歴社会を批判する議論よりも、学歴社会を変えられないことを前提とした上で、個人がどう振る舞うかを考える風潮が強い。その意味では、反学校的教養主義文化が育ちやすい状況にあると言える。学歴社会というシステムを壊すことは難しいとしても、そんな若者たちを社会の中でどう生かすかは喫緊の課題なのである。

四　非中道の分派メカニズム

その意味で、本書の延長線上で今後さらに研究する価値があるのは、そうした教養主義青年たちの「分派」のメカニズムである。前述したように「丸少年」たちは安保の是非をめぐって分派したとされる。安保反対の立場をとった学生たちは、戦後民主主義の不徹底を批判したのであり、安保に賛成した者は戦後民主主義の理念自体を批判している。ただ、いずれにしても、戦後民主主義に批判的であった点は共通しているのだ。当時のスタンダードであった戦後民主主義を「中道」と考えれば、どちらの立場も「非中道路線」であると言える。

こうした状況を踏まえて、ないものねだりを承知で言えば、彼らがどのような要因でこうした立場を選び取っていったのかが知りたいところではある。「彼らの学歴やその後についた仕事はどうだったのか？」「家庭の文化資本はどの程度だったか？」「住んでいる場所は都会か田舎か？」など、考えられる変数は無数にある。これはあくまで雑誌の誌面を越えた問いではあるが、ミクロな調査を積み重ねれば、ある程度の法則は発見できるかもしれない。今後の研究の発展に期待したい。

五　「雑」であることの可能性

本書は最後に雑誌のあり方に言及している。本書で見てきたように、元来の『丸』は多様な立場の議論に触れられる回路を有していた。しかし、現在の『丸』はいわゆる「右派」的な色彩で塗りつぶされている。それは、「丸は全てを含む」という誌名の由来が忘却され、「日の丸」の「丸」であると誤解されている状況に象徴的に表れている。

筆者はこうした単一の回路しかなくなり、雑誌の「雑」の部分が失われている状況に警鐘を鳴らす。異なる意見に出会うチャンスはネットのみならず、雑誌からも失われつつあるのだ。本来、細分化メディアであったは

ずの雑誌だが、インターネットと棲み分けし、特化させて生き残るための機能があるとすれば、それは筆者の言う「雑」の部分なのかもしれない。

「戦争」という戦後日本においては思想的立場と密接に結びついた対象を扱った『丸』の歴史は、異なる意見を持つ人間が同じコンテンツに集い、議論することが出来た、ある意味で「幸福な時代」の記録であり、これからの情報環境を考えるヒントを与えてくれる。現代において「雑」なメディアはいかにして可能か？そんな問いを考える上で『丸』は最も有益なサンプルであったといえよう。

(一) 佐藤彰宣『〈趣味〉としての戦争―戦記雑誌『丸』の文化史』創元社、二〇一一年、九頁。
(二) 佐藤彰宣、前掲書、六五頁。
(三) 佐藤彰宣、前掲書、一三〇頁。
(四) たとえば、猪木武徳『増補 学校と工場―二十世紀日本の人的資源』筑摩書房、二〇一六年。
(五) 佐藤卓己『テレビ的教養―一億総博知化への系譜』NTT出版、二〇〇八年。